音読テキスト「日本の名文」18

青空文庫を元としています
また日本近代文学大系8「樋口一葉集」（角川書店）も参考。
参考　：ウィキペディア

にごりえ

樋口一葉

お力は一散に家を出て、行かれるものならこのままに、唐天竺の果てまでも行ってしまいたい。ああ嫌だ嫌だ嫌だ、どうしたなら人の声も聞こえない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうっとして、物思いのない処へ行かれるであろう。つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情けない悲しい心細い中に、何時まで私は止められているのかしら。これが一生か、一生がこれか、ああ嫌だ嫌だと道端の立木へ夢中に寄りかかってしばらくそこに立ちどまれば、渡るにや怕し渡らねばと、自分のうたいし声をそのまま、何処ともなく響いて来るに、仕方がない。やっぱり私も丸木橋をば渡らずばなるまい。父さんも踏みかえして落ちておしまいなされ、祖父さんも同じ事であったという。どうで幾代もの恨みを背負うて出た私なれば、するだけの事はしなければ、死んでも死なれぬのであろう。情けないとても、誰も哀れと思うてくれる人はあるまじく、悲しいといえば、商売がらを嫌うかとひと口に言われてしまう。ええどうなりとも勝手になれ、勝手になれ。私には以上考えたとて、私の身の行き方は分からぬなれば、分からぬなりに菊の井のお力を通してゆこう。（中略）我身ながら分からぬ。もうもう返りましょうとて横町の闇をば出はなれて、夜店の並ぶにぎやかなる小路を気まぎらしにと、ぶらぶら歩けば、行かよう人の顔小さく小さく、擦れ違う人の顔さえも遥かとおくに見るよう思われて、我が踏む土のみ一丈も上にあがりいる如く、がやがやという声は聞こゆれど、井の底に物を落としたる如き響きに聞なされて、人の声は、人の声、我が考えは考えと別々に成りて、更に何事にも気のまぎれる物なく、人立おびただしき夫婦あらそいの軒先などを過ぐるとも、ただ我のみは広野の原の冬枯れを行くように、心に止まる物もなく、気にかかる景色にも覚えぬは、我ながら酷く逆上せて人心のないのにと覚束なく、気が狂いはせぬかと立ちどまる途端、お力、何処へ行くとて、肩を打つ人あり。

樋口一葉：ひぐちいちよう、一八七二（明治五）年～一八九六（明治二九）年。明治の小説家、歌人。日本の近代文学最初の女性作家。代表作に上記以外に「たけくらべ」「つごもり」などがあり、わずか一年余の間に著した。死の直前、絶賛されるが、生活に苦しみつつ、二十四歳で死去。

《梗概》

お力は店の看板酌婦、器量もよく人気があった。かつて、源七という大棚の商家の息子はお力に入れあげて身上を潰し、今では、妻子と三人で貧しい長屋くらしであるが、お力への未練を捨てることができない。

そこへ、お力の前に新たな上客、結城が現れる。しかし、お力は、おのれの身分、将来への心配、祖父の狂ったような性格を受け継いでいるのではないかという不安など、憂慮の種が尽きず、あるとき思いあまって、店の外に飛び出し、混乱した意識で町を彷徨する。引用文は、その部分。

その時後ろから声をかけたのが結城で、お力の身の上を聞き、初めてその苦悩を知る。他方、源七はすがりつく妻子を振り捨てて離縁。

最後の章は突然、二つの棺が街中を運ばれていく場面。腹を切った源七と源七に切られたお力の棺であった。合意の上とも単に殺されたとも噂された。

◎文章は近代的には洗練されていないが、リズム感に溢れ、力強く、優れた心理描写と流れるような雅俗一体文は、見事に女の内面を描写した。声に出して読むといかに優れた文体かわかる。

家財を売り「家には一銭もない」と、貧困の中で、文学で身を立てようと苦しんだ一葉が五千円札の肖像になったのは、歴史の皮肉だろうか。